

## 仙台基督教育児院創設と組織体制に関する基礎的研究

### —子どもの「日常生活」を支える時間・空間・人間関係—

24GM003

#### 要約

本研究で取り上げる「仙台基督教育児院」は、1905年の東北三県凶作を背景として1906年に設立され、制度的支援が十分に整備されていない中、運営されていた施設である。従来の研究が教育面に主として焦点を当ててきたのに対し、本研究では日誌や院児名簿などの一次史料を用い、子どもの生活実態を時間軸に沿って整理、検討を行う。そのうえで、施設における子どもの「日常生活」がもつ意味とその本質を明らかにすることを目的とする。

第1章では、仙台基督教育児院の創設背景と組織形成を明らかにする。東北地方は歴史的に凶作が頻発し、仙台基督教育児院創設のきっかけとなり、1905年の東北三県凶作は貧困と孤児問題を深刻化させた。この状況下で、岡山孤児院をはじめとする施設は子どもたちの救済を担ったが、東北地域内では子どものための施設が不足していた。また、明治期や大正期の児童問題が深刻化し、子どもは労働力や治安対策の対象として扱われる傾向が強かった。こうした中、宗教者を中心とした慈善事業の動きの中で仙台基督教育児院が創設された。

第2章では、慈善事業期にあたる明治期の仙台基督教育児院における子どもの日常生活を検討する。日誌や院児名簿、理事会記録をもとに、児童数や財政状況を整理した上で、食事、衛生管理、生活規則といった具体的な生活内容を分析する。育児院の日常生活は、寄付等に支えられながら維持されていた。そして、規則正しい食事、掃除や洗濯などの役割分担、行事の実施を通じて、子どもたちは生活のリズムを獲得していた。本章は、明治期の育児院が不定期の理事会開催等の不安定な運営状況下にあっても、日常生活を通じて子どもの成長を支えようとしていた実態を示している。

第3章では、社会事業期に移行した大正期の仙台基督教育児院における子どもの日常生活を分析する。大正期には、育児院の財政や運営体制も一定の安定をみせるようになる。子どもの「日常生活」を支える基盤は、明治期から一貫していることが明らかになった。また、理事会記録からは、施設運営がより計画的・組織的に行われるようになったことが読み取れる。日常生活を時間軸で整理すると、行事や学校生活が生活リズムの中心を占め、子どもにとって安定した生活環境が整備されていたことが明らかとなる。

終章では、各章の分析を踏まえ、仙台基督教育児院における子どもの日常生活の意義を総括する。まず、施設における子どもの日常生活を検討することは、人が人として生き続けるための生活の基盤を、社会がいかに構築し、保障しようとしたのかを歴史的に問い直す試みである。そして明治期から大正期にかけて、その具体的な形態は変化しつつも、日常生活を通じて子どもを育てるという本質は一貫していた。本研究は、日常生活を、支援そのものとして捉える視点の有効性を示している。また、歴史的な事象の分析を通じて、現代の社会的養護においても、制度や専門支援だけでなく、生活の質を重視することの重要性が示唆される。過去の施設実践は、今日の児童養護の課題を考えるうえで豊かな示唆を与えるものである。